

ペンテコステ礼拝 説教 「平和があるように」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年6月5日

マタイによる福音書 10:5~10:15

キリスト教の三大祝祭日の一つであるペンテコステ、聖霊降臨日を迎えました。聖霊が主の弟子である「私たち」の上に臨み、主の教会が誕生し、そのことを覚え、今年もこうして共にお祝いできる幸いを心より感謝します。それは、聖霊降臨という主の救いの実現を共に祝うえばこそ、福音宣教の使命に生きるこの喜びを改めて実感させられもするからです。なぜなら、この恵み、この喜びの中に毎日を過ごしているのが主の弟子たる私たち信仰者でもあり、ですから、私たちが、もしこれまでただ一度として、この信仰の喜びを感じたことがないとしたら、それは、私たちが福音に生き、福音を宣べ伝える使命に生きていないということでもあるからです。ただし、その場合の喜びとは具体的にはいかなるものなのでしょうか。

そこで言えることは、福音に生き、福音を宣べ伝える喜びとは、喉ごしだけ爽やかでありさえすればそれでいいというものではないということです。この日の御言葉が語るように、弟子としての使命に生きることはそれ相当の覚悟と厳しさを伴うものであり、それゆえ、その弟子たる私たちを支えるべく与えられたものが聖霊でありました。ただ、与えられると同時にそこで明らかにされたことは、それは私たちの感性、理性、知性などに訴えつつも、主の弟子たる私たちそのものが、イエス様を信じるがゆえに神様のものとなった、されたということでした。ですから、これはたまたまではありませんが、この日の御言葉は、イエス様が福音宣教のために十二人の弟子たちを派遣する際に語られたお言葉です。今日がペンテコステであることを思い出すと、この日の御言葉がこうして私たちに与えられているのは、まさに聖霊の導き、つまり、私たちの上に聖霊が豊かに臨んでいるがゆえのものであるということです。それゆえ、聖霊の働きは、遠い昔のことではありません。主の弟子たる私たちにとっては、今、現実にあることなのです。

そこで、今日は、聖霊が私たちの上に臨んでいることを特別に意識しながら、一緒にこの日の御言葉に聞いて参りたいと思いますが、ところで、先週学んだように、十二人の弟子たちの選びは、働き手が与えられるようにとの人々の祈りによるものでありました。つまり、言葉としてははっきりと記されてはおりませんが、その背後には聖霊の働きがあったということです。そして、今日は、御言葉の担い手である十二人の弟子たちが町々、村々、その辻辻に遣わされるにあたって、イエス様がそのなすべき務めとそれに伴うその心掛け等を語っておられるのですが、そのお言葉は非常に明瞭で、語られている内容自体は誰もが理解できることでもあるのでしょうか。それゆえ、弟子たる私たちも「ああそうか」と思い、このイエス様の求めに真面目に応えようとするわけです。しかし、大事なことであるがゆえに、そこでよくよく聞いていく中であることに気がつかされるのです。それは、「あれ、おかしいぞ」ということです。

マタイによる福音書の一番最後のところで、復活のイエス様は弟子たちに向かってこう仰っています。「あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」と。これを聞いて、「あれっ」と思わないでしょうか。なぜなら、ここでは、異邦人、サマリア人とは関わるなど言いながら、最後のところでは、「すべての民に」とイエス様が仰っているからです。また、それだけではありません。弟子としての覚悟のほどを求めるイエス様のこのお言葉も、語られている内容についてはよく分かるのですが、問題は、どうしてそれを求めるのか、その理由、その意図するところがよく分からないということです。それは、一体誰がここで求められていることをその通りに実行できるのかと思うからです。特に、「旅には袋も二枚の下着も、履き物も杖ももって行ってはいけない」と仰る、このことの意味が

よく分かりません。パレスチナの大地は太陽を遮るものが少なく、砂と岩ばかりがその大地を覆っているわけです。ですから、履き物がなければ歩くことすらままならないわけです。このように、「持っていったはいけない」と仰るこの言葉は、あまりに荒唐無稽で実現不可能なものであり、また、私たちの現実からは余りにかけ離れたところから語られているものでもあるのでしょう。それゆえ、私たちの多くは、それを理由にここで語られていることにあまり重きを置かなくなったりもするのでしょう。しかも、ここで語られているイエス様のお言葉には、明らかな矛盾すら含んでいるのです。ですから、ここで語られている言葉に一端は耳を傾けたとしても、素直に聞き従うことは私たちにはやはり難しいようにも思うのです。しかし、仮にそうであっても、ここには、やはり見過ごしにはできない大事なことが語られているのです。

福音に生き、福音を宣べ伝える使命に生きる弟子たる者として、私たちが決して忘れてはならないことは、「平和をもたらす」ということです。それは、福音宣教という伝道の業は、平和が失われている町々、村々、辻辻に主の平和を運ぶことであり、そこに働くものが聖霊でもあるからです。ですから、「イスラエルの家の失われた羊のところ」とはそういう意味で語られていることです。従って、そのために私たちに求められることは、口先だけで「平和」を語ることはありません。平和を伝え、平和を造り出すことです。そして、それが私たちに許されているのは、まさに聖霊降臨の出来事が示すように、私たちが主の平安の内に生きていますからです。ところが、その私たちがもし平和をもたらすことができないとしたらどういうことになるのでしょうか。つまり、その時、私たちは、福音を語る資格を失ってしまっているということです。しかし、たとえ私たちが失敗したとしても、御言葉はその逆のことを語るのです。創り出すことに失敗しても、平和は、そのまま私たちに戻ってくると、つまり、この戻ってくることに、イエス様の仰る平和の中身を見ることができるということです。

平和は私たちが様々なものと関わるからこそ、そこに実現するものです。けれども、この平和は、私たちの努力の産物ではありません。私たちを通し、私たち

と関わるすべての人々がイエス様との関わりの中に招かれればこそ、そこに実現するものなのです。だから、それを拒む者との間には平和は実現せず、この恵みはそのまま私たちの元に戻ってくるということです。このことはつまり、私たちがすでに主の平安の内に置かれているからでもあります。それゆえ、平和が私たちの上より取り除かれることはありません。ですから、ここから、ここで語られていることをもう一度振り返るなら、その一つ一つの大切さがよく分かるようにも思うのです。なぜなら、主の平安はいつでもどこでもどんな状況の中でも常に私たちに約束されているものであり、ここでのことはすべてこの前提に立って語られているものだからです。

しかし、それが分かったとしても、ここでのことは、現実的には、やはり「そうは言っても」という類いのものでもあるのでしょう。無理なことはどこまで行っても無理だからです。しかし、イエス様はそれを私たちに求めておられる。それゆえ、求められている以上、私たちは、どうしても、それをするかしないか、それができるかできないか、この点から考えてしまうのです。そして、そもそものところ而言えば、今も申しましたように、平和が私たちの上より取り除かれることはありません。ですから、できないと言うところから考えることはそれ自体誤りであるということです。ここでのことを、弟子たる者にイエス様が覚悟のほどを求められていると理解してしまうのはそのためでもあります。けれども、そうなると、ここでのことは踏み絵を踏ませるに等しいものとなってしまいます。それゆえ、話はそれだけでは終わりません。イエス様の弟子たる身分に与るということはどういうことなのでしょう。ここでのことが私たちの覚悟、その意気込み、決意を求めるものとしたら、ここでのイエス様のお言葉は、「生きて虜囚の辱めを受けず」と語ったあの「戦陣訓」と一体何が違うのでしょうか。伝道は、その成果を誇り、武勇伝のように何かを語ることはありません。福音に生き、福音を宣べ伝えるということは、御言葉が私たちそれぞれの中心に置かれるということです。すべての人々に主の平和が実現するのはそのためでもあります。従って、イエス様がここで仰っていることは、まさに

この事実、福音に生きる私たちの置かれた現実そのものを語っているのということです。ですから、最初のところで語られているイエス様の言葉には矛盾はありません。けれども、それがすんなりとは腹に落ちない、それゆえ、イエス様がそう語る理由については、その言葉尻だけを捉えて分かるのではなく、その言葉の背後にあるものをしっかりと見る必要があるのです。

マタイによる福音書 23:15 で、イエス様が「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。改宗者を一人つくろうとして、海と陸を巡り歩くが、改宗者ができると、自分より倍も悪い地獄の子にしてしまうからだ。」と仰るように、伝道は私たちキリスト教会だけの専売特許ではありません。ユダヤ人もまたその信仰を広く宣べ伝えていたわけですが、その理由は、自分たちは救われている、満たされているのだとの思いがあったからです。つまり、覇権主義的伝道活動を展開していたのが当時のユダヤの人々であり、そして、彼らが外へ外へと向かう理由は、その霊的傲慢さゆえであったと、イエス様はこう仰りたいのです。ただし、そこで私たちはあることに気をつけなければなりません。それは、私たちのなすべき事は、彼らの逆に行くことではないからです。何事もそうですが、私たちがもし彼らの逆を行こうとして行き過ぎた時、その時の私たちと彼らとでは、どこが違うと言えるのでしょうか。行き過ぎた時、右と左との違いがよく分からなくなるように、そのとき、私たちもまた霊的傲慢さを現わすことになるのです。それは、私たちが、こうあらねばならない、こうせねばならないと強く心に言い聞かせ、それを実行しよう、させようとするからです。けれども、ならぬものはならぬ、ということを私たちが忠実に守ろうとするのは、それをするしない、それができるできない、このことに拘ってのことではありません。それとはまったく別のことなのです。それが、先ほどから申し上げている、私たちがイエス様の平和の許に置かれているということです。

ですから、そこで求められることは、それをするかしないか、それができるかできないかではありません。ただそこにいること、そうあること、それだけが私たちに求められているのであり、強くあ

ろう、大きくなろう、とすることではありません。しかし、大きく大きくなろうとする人々にとっては、力こそが大きな意味を持つものです。けれども、主の弟子たる私たちにとって、そこで大きな意味を持つのは力ではありません。たとえ私たちが弱く儂いものであったとしても、それでも私たちは守られているという、この安心感こそが私たちにとっては一番大きな意味を持つのです。それは、その私たちとイエス様がどんな時にも共にいてくださっているからです。ですから、聖霊降臨の出来事は私たちにとっては神秘体験でもなく、ましてやオカルト的な超常現象でもありません。こうして主の教会に連なる私たちはイエス様ゆえに神様に守られている、この現実をそのまま明らかにする出来事が聖霊降臨の出来事であり、そして、この日の御言葉でもあるのです。

それゆえ、この守られているという視点に立ってここでのことを見て行くと、それは、強迫観念のように私たちに苦しめるものでないことが分かります。主の平和、主の守り、主の支え、イエス様のここでのお言葉は、まさにこの現実そのものを現しているのであり、そして、そこで大事な点はそれが天上のような特別な世界において約束されているものではないということです。「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である」とイエス様が仰るように、この世において約束されているものでもあるのです。ですから、この一切無一物という姿勢について、ある人は次のように述べております。それは、私たちににとっての身近でとても大切に、私たちの生活から切り離すことのできないものです。その人は、私たちが繰り返し行ってきたあることになぞらえて語るのですが、それは、神様を礼拝する私たちです。つまり、一切無一物の姿勢とは、礼拝者たる私たちの姿であるということです。それは、こうして神様の御前に立つ私たちは、自らの罪、その弱さ、愚かさ、至らなさを携えその身前に立つわけですが、つまりは、何一つ誇るべきものを持たずに神様を礼拝するのが私たちであるということです。それは、罪だけを携えるしかない私たちだからこそ、神様によってその罪赦された私たち

は心からの安らぎ、平安を受けることにもなるからです。それがここで言われている平和、主の平安でもあります。ですから、伝道とは、神様に守られているという、この安心が得られ、そこで初めてなせる業だと言えるのでしょうか。それゆえ、ここに記されていることは、そういう意味での私たちの日常、日々の暮らしがイエス様によって淡々と語られているということです。

しかし、そうであればこそまた私たちはある思いに捕らわれてしまうのです。それは、私たちが繰り返し繰り返し礼拝に招かれ、イエス様の救いに与らねばならないのはどうしてなのでしょう。それは、その罪ゆえに再びイエス様の御前に戻るしかないのが私たちであるからです。そして、それは、私たちが主の平和を見失ってしまうからでもあります。けれども、それを繰り返す中でまた私たちは知らされるのです。それは、ぼんやりとしていたものが少しずつはっきりしていくということでもあります。そのために求められることが悔い改めです。ただし、この悔い改めについて、皆さんは誤解がないでしょうか。悔い改めは、私たち神様を信じる者の専売特許といってよいものです。それは、それ以外の人々は、反省はできても悔い改めることはできないからです。しかし、主の弟子たる私たちは違います。罪を見つめ、その罪が赦され、それゆえ、その先を見通すことができるからです。そして、この先を見通す力を私たちは希望と呼んだりもするのですが、ですから、信仰が個人の自信や腕前の問題に陥らないのは、私たちがこの希望を見つめるがゆえのことでもあるのです。

希望を通して私たちがこの先に見つめるものとは、イエス様と顔と顔を合わすことのできる終わりの日です。この終わりに向かって、こうして共に歩んでいるのがイエス様の弟子たる私たちなのです。ですから、その私たちが道を踏み外すことがないのは、希望ゆえにその先をしっかりと見通せているからでもあります。けれども、このことはまた、罪人である私たちにとっては、ネガティブな側面を有することにもなるのでしょうか。それは、私たちの人生が、ある意味で、しょうがない、仕方ない、と思うしかないことに満ちあふれているからです。そして、それがまさに、ここでイエス様が

命じておられることでもあるのでしょうか。なぜなら、一切無一物ということも、また、思い通り、願い通りに平和が実現しないということも、私たちの気持ちを萎えさせるものでもあるからです。しかし、そうであればこそその悔い改めでもあるのです。それは、悔い改めは、私たちの内には見つけようにも見つからない、希望という確かな道筋を示すものでもあるからです。ですから、そういう意味で、悔い改めは、私たちが晴れ晴れとさせます。私たちが喜びに満たされた顔に造り替えるのです。従って、笑顔こそが悔い改めた私たちにはふさわしい有様であり、それゆえ、そこには間違いなく平和が実現するのです。ですから、口をとんがらせて愛を語りながらも、そこに平和が実現していないのは、私たちが悔い改め、希望を見つめえないからでもあるのでしょうか。

最後に、では、そのために私たちはどうすればいいのでしょうか。悔い改めも、愛も、そして、平和も、私たちの努力のたまものではありません。人間的な力をもって果たしうるものではなく、御言葉にあるように、ただで与えられたものでもあるのです。では、そこで私たち何をすればいいのでしょうか。希望を見失い、平和を見失ってしまうその時、私たちは何をすればいいのでしょうか。悔い改めは、そのような時、私たちに確かな気づきを与えてくれるのですが、それが、いつも繰り返し申しておりますように、神様とイエス様の内側に私たちが生かされているということです。ですから、しょうがない、仕方ないということは、主の弟子たる私たちにとっては、決してネガティブな発想ではありません。むしろその逆です。なぜなら、その時、私たちは、確かなものにすべてを委ねることができるからです。そして、私たちがそのように神様の内なるものであることを明らかにしたのが聖霊降臨の出来事でもありました。だから、私たちも、そして、私たちと関わるすべての人々も、主の平安の内に置かれ、神様の祝福の中に躓きながらも、その都度、悔い改めることによって正しい方向へと導かれていくのです。そのことをもう一度しっかりとその胸にとどめ、新たな歩みへと導かれて参りましょう。祈ります。